

自蹊庵便り

令和五年 水無月

NO 162

茶事折々 炉から風炉への誘い

過ぎて逝きます。

儀なく、日曜日十三名、月曜日十三名、火

あゝ、何と早いことか、一日が短くなっ

茶事においては瞬間くの湯相、火相を掬い

曜日八名の席入りにございました。

てしまったのか、一月という三十日の営み
が、まことにまことに早いのです。 よわい 齢と

とり、今の今の働きを余念無く…とは、常、
皆さんに云ってきていることにございます

炉から風炉に至り、この五月初風炉の炭
つぎほど悩ましいものはなく、ゆえに土風

いうものの持ち時間の切なさ、早く感じ
させてしまうのでしょうか。

が、吾が身にあつては心身とのバランス、
すこぶる折合悪しく、悪しからずの日々を

床でなくては、火の持ちよう、湯の沸きよ
う、共に難しきことにございます。

尊敬申し上げている茶のお仲間九十歳

うべなうばかりにございます。

水屋担当者は炉と同じように三炭調べて

を過ぎながらも、遠方よりリュックを背負
い、和装で電車を通っておられるYさんの

この度のように炉から風炉に至り、障子
の入れ替え、道具しかり、庭の枝も伸び放

てスタートしたいのですが、それでは
中立ち直前、お菓子の前に炭手前というこ

言葉「寝てしまつたら朝が来てしまうのよ
ねえ…」と、長年この方と共に恩師の教え

題、かつては一人でできていたことも、お
人に助けて頂くことも多くなりつつありま

とでは。本席の人数も多く、炭手前の頃は
は消えていることでしょう。悩ましくむず

を一つでも多くのことを学びたく通い続け
ている茶友にございますが、私もまたこの

す。
こうして少しずつ、お人への依存度も増

かしき。初風炉の炭つぎにございます。

Yさんの言葉の重みをずしりと、身にも
心にも感じ入り、受け止めてのこの頃にご

しつつ、齢というものと向き合っていくの
でございましょう。

亭主の私も予知しながらも端午の節供と
いうこともあり、長板に青磁の皆具という

ざいます。

この五月、京都は大徳寺餘慶庵での端午

取り合わせにしてしまい。よって風炉釜は

まことに思いの半分も、いえく十分の一
もこなせずさらさらと一日、一月、一年が

の茶事においては、コロナの緩和も手伝っ
てのこともあり、久々に席入り十名越え余

小振りのものに。配慮の足りぬ不手際な道
具合わせになつてしまい水屋担当の方には

御苦労をおかけしてしまいました。

控え釜の湯も充分にあさから整えておき、炭を足し添え足し添えするも、連日初夏を越え、真夏日のような日が続く中で茶事にございます。

台所の煮炊き共々、余分な火や湯気、部屋を温めすぎぬよう使用した冷房も日がな一日かけていたのでは、漆器類も気がかりなになり、湯気立つ湿気の強い処での濃茶、薄茶をはくことさえ気にかかります。台所方、水屋方も、着物での所作、働きにございます。

余分な炭つぎのなきよう、程良く間に合うよう、雑炭も充分に足し添え、足し添え、緩急宜しく調えることが出来、熟知するには、間に合う仕事ができるよう誘導する。通り一遍の炭手前なども見事に裏切られ、その場に合った生きた茶事をする事、場数の智恵のいることにごさいます。

気働きの連続、そしてチームプレー、一つとして気の抜けない裏方の働きなれど、

席中からは終日和やかな笑い声が聴こえて

おり、障子や襖ごしに伝わりくる、楽しそうなお声に助けられながら、裏方での不手際が、席中に空気伝染せぬよう、皆々一所懸命勤めてくれました。

そう、ここが大切なのです。どんな不手際もアクシデントをも、すみやかにさりりと智恵を出し合つて、お席中に気配を感じさせぬよう、満足してお帰り頂けるよう、一願となつて一席を調える。毎日の裏方のスタツフ、お人も変わる中でのチームプレーにございます。

そこには、昔ながらのよく云われているところの三人寄れば文殊の知恵というものもございましょう。でも、いつも思うことなのですが、その前手に、智恵以上に大切なもの、皆さんの心映えの優しさがあります。その時どうする…という突発的な失敗も、先ずはみんなの優しさとチームワークで急場をしのぎ、そして知恵を出し合う、この心映えの鍛錬の連鎖の賜物にごさいます。

す。

この度の京都の茶事においては、主力メンバーが二人も欠けるといふアクシデントもありながら、台所方の役目、水屋方の役目、皆々余年なくよくよく勤めてくれました。終わってみれば一つ一つ智恵というデーターの宝物を一杯積まれたことにごさいます。私こと、亭主も今少し、皆様の働きに背中をそつと温かく押せる程の技量を、自らに育てていきたいものです。

端午の節句の有職飾りの道具、菓玉の画賛など、いつも快く御協力くださる皆様のお陰で、この度も亭主の技量不足を助けて頂きました。杜若の固い蕾の花結界も一輪開き、二輪、三輪と開きつつ、三日目の終わり頃には満開になり、窯の湯気のそばでよく三日間持ちこたえてくれたものです。時間と云うものの馳走の有り難さの身に染みた一席くにごさいます。遠方より御来駕賜りました皆様に篤く御礼申し上げます。